

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	無症候性高尿酸血症の患者特性による栄養指導効果の差異の検討および身体活動量や骨格筋量を指標とした個別化栄養教育法の構築				
研究組織	代表者	所属・職名	食品栄養科学部・助教	氏名	川上 由香
	研究分担者	所属・職名	食品栄養科学部・教授	氏名	新井 英一
		所属・職名	浅井内科医院・医師	氏名	浅井 寿彦
		所属・職名	浅井内科医院・管理栄養士	氏名	近藤 理帆
		所属・職名	薬食生命科学総合学府・修士2年	氏名	小池 吏砂
		所属・職名	薬食生命科学総合学府・修士2年	氏名	佐藤 めぐみ
	発表者	所属・職名	食品栄養科学部・助教	氏名	川上 由香

講演題目	無症候性高尿酸血症の患者特性による栄養指導効果の差異の検討および身体活動量や骨格筋量を指標とした個別化栄養教育法の構築
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【背景・目的】高尿酸血症は、メタボリックシンドロームと関連が深く、腎機能障害や心血管疾患の原因となる。本研究は、無症候性高尿酸血症の栄養指導に関するエビデンスの構築を目的として、ガイドラインに記載のある推奨項目（適正なエネルギーの摂取、プリン体の過剰摂取の回避、果糖の過剰摂取の回避、アルコール摂取制限、腎機能に応じた適切な飲水）に沿った栄養指導の有効性を評価した。</p> <p>【方法】対象者は、薬物治療を開始していない無症候性高尿酸血症患者 35 名（男性 25 名、女性 10 名）とし、6 ヶ月間の栄養指導の効果について検討した。管理栄養士による栄養指導を毎月実施し、プリン体含有量が多い食品、果物、清涼飲料水、アルコールの摂取量および飲水量の摂取量を算出した。栄養指導介入前、介入 6 ヶ月後において、身体測定、血圧測定、採血および簡易型自記式食事歴法質問票を用いた食事調査を実施した。また、栄養指導介入前および介入 6 ヶ月後において 24 時間蓄尿を実施した。</p> <p>【結果・考察】血清尿酸値は介入前 7.7 ± 0.4 mg/dL から介入 6 ヶ月後 7.1 ± 0.9 mg/dL に有意に低下した。35 名中 16 名が介入 6 ヶ月後に血清尿酸値 7.0 mg/dL 以下を達成した。栄養指導介入前に比して介入 6 ヶ月後に、尿量と尿酸排泄効率は有意に増加し、尿中尿酸濃度は有意に低下した。肥満を有する対象者において、体重、BMI および腹囲が介入 6 ヶ月後に有意に低下した。また、飲酒習慣がある対象者において、アルコール摂取量は介入 6 ヶ月後に有意に低下した。年齢層別化解析を行ったところ、70 歳未満および 70 歳以上の両群で介入後に血清尿酸値は有意に低下した。肥満を呈する対象者の多かった 70 歳未満の群では介入後に体重・腹囲の改善がみられたが、70 歳以上の群では体重は保たれており、不必要な減量やエネルギー摂取量の減少は防ぐことができたと考えられる。したがって、本研究により無症候性高尿酸血症患者に対する栄養指導は血清尿酸値を改善させることが示唆された。さらに、介入 6 ヶ月間における血清尿酸値の変化量と腎機能に関する指標の変化量との間に有意な関連がみられた。無症候性高尿酸血症患者に対する栄養指導は、血清尿酸値の低下を介して、腎保護効果をもたらす可能性が考えられる。</p> <p>薬物療法を行う前に栄養指導などの生活指導を行うことで、服薬することなく血清尿酸値を低下させることができれば、合併症の予防につながると思われる。本研究は、高尿酸血症に対する栄養指導が有用であることを示すエビデンスの一つとなると考えられる。</p>